

月の足跡

彩野

祖父さんの作った家には、いくつもの謎が残されている。

パツとしない人生を過ごし、波乱のない人生を送ってきたそんな祖父さんが、定年を機に一念発起して、建築士の資格を取得したときは、一族郎党がそろって目を丸くした。

みんなが啞然としている前で、祖父さんのペンが描き上げた家は、彼の退職金と、こつこつ積み上げられたちよつと驚く額の貯金でもって、街はずれの海が見える丘の上に建てられた。

その姿に満足したのか、この家の完成を見届けた後、祖父さんは安らかに天に召されていった。ほどなくして、祖母さんも夫のもとに旅立ち、この家だけがぽつんと取り残された。

いまや形見となったこの家。

外観は、サイコロのような白い立方体だ。が、中は大小いくつもの部屋に分かれており、それぞれに名前がつけられていた。

「で、君はわたしに何をお願いするのかな？」

「部屋の名前の由来を考えて欲しいんだよ」

自称女子高生探偵、松本かえでは、ふむとうなづく
と玄関の扉を開けた。僕はため息をついて、彼女のあ
とに家に入る。

ステイツクキャンディをくわえ、ときどきそれを口
から離して、ふうと息を吐く。

「何してんの？」と僕が聞く。

「パイプの代わり」と彼女は答えた。「ホームズみた
いでしょ？」

探偵に憧れる彼女が、この家に興味を持つのは当然
の結果と言えるだろう。

近しい友人たちには、この家には謎があるというこ
とを話したことがあり、それが回り回っているうちに、
松本かえでのアンテナに引っかかり、

「それじゃあ、わたしが推理してあげよう」

と言い出すことは、想像に難くない。

特別に仲が良いわけじゃないし、話はするけれど用
事があるときだけ。

これが、僕と松本かえでの距離だったから、突然で
唐突で強引な彼女の申し出に、渋い顔をするのは仕方

のないことで、やんわりとお断りの言葉を並べたてはみたが、彼女はお構いなしに、ずけずけと放課後の予定を立てて、いまに至るといいうわけだ。

六月の放課後は明るい。外には、すこし涼んだ風が流れているものの、玄関を開けると、むわつとした生暖かい空気がもれてきた。

おじやましまーす、と松本かえでは靴を脱いで上がる。僕もそれについて行く。

「ほうほう、君の言うとおりにいくつも部屋があるんだね」
額の汗をぬぐいながら、彼女はドアの横やら上やらに張ってあるプレートを読んでいく。

いくつかの部屋の由来は分かっているんだ、と僕は説明する。

膝丈ぐらいしかないドアには『猫の間』と名がつけられており、中をのぞくと、菓子箱みたいな橙色のがひとつだけ設置されている。

「コタツだね」

「そう、コタツの中みたいだから猫の間」

なるほど、と彼女が大きくなづく。目をきらきらさせている。

「こうやって、いろんなものを想起させる部屋があるんだ。わかりやすいのだと、蜘蛛の間」

「床が格子状とか？」

「ご明察。それは、二階の屋根裏部屋なんだけど、下から見上げると、別の名前がついてるんだ、それは、」

「牢屋の間、とか？」

「！」

「当たったんだ？」

松本かえでが、得意げな笑みを浮かべる。

これは、女子高生探偵と自称するのは伊達じゃないかもしれない。

「さあ案内したまえ、ワトソン君」

でも、調子に乗りそうだから褒め言葉は黙っておくか。

二階の一番大きな部屋に、彼女を案内する。

『苔の間』

「この意味がわからない」

大きな部屋だった。調度品がないため余計に広く感じる。壁のいたるところに鏡が取り付けられており、

部屋の半分以上がガラスにより透けているため、思わず目を背けるほど眩しい場所だった。

眩しいのに、その対極のような苔と名付けられているとは、これいかに。

腕組みする彼女を見て、やつぱりわかんないかな、とあくびした瞬間、いきなり首根っこを掴まれ『苔の間』に放り込まれた。

バランスを崩し、床に倒れこんだ僕を見下ろしながら、彼女は勝ち誇ったように唇の端をあげて言った。

「この時期に、こんな部屋なんか入ったら暑くてしょうがないんじゃない？」

夕日にはまだ早い太陽が、四方八方から攻撃してくる。さつき入ったばかりだというのに、もう全身に汗の粒がにじみ出てきた。

「さて、君はこの部屋で、この暑さから逃げるためにどうするんだろうか」

その問いかけに、僕は首を伸ばして部屋を見渡す。何も置かれていない空間に、一つだけ影ができている部分を見つけた。そこに僕は転がり込む。けれど、その影の面積はとても小さいために、僕は腕と足を折

りたたんで入らなければならなかった。

小さな陰溜まりに僕は収まる。

「ほら、これで謎は解けたでしょ」

そこは、意図的に作られた光の当たらない部分なんだよ、と彼女は言った。

「この部屋の壁をよく見てみるとね、日焼けしている部分がはつきりと分かれているの」

彼女の指さす壁を見る。確かに、白い壁がちよつと褐色に変化している。

「何も置かれていないのに陽が当たらない。鏡で反射させているのに陰ができる。しかも計算されたように、人が一人分しか入れないぐらいの大きさに」

これは、入室した人間が苔みたいにじめじめした場所を探させるためにできている。

君のお祖父さんはすごいね、と彼女が笑った。僕は何だか照れくさくなって丸くなったままだった。

「さて、名前の意味がわからなかったのは、この部屋だけなのかな？」

もうひとつあるんだ、と僕は苔から人間に戻って言った。

今度は薄暗い部屋だった。一階の奥にあり、二畳ほどのスペースは建物の一番上まで吹き抜けており、唯一の窓は天井にひとつ、僕が腕を広げたぐらい大きな丸い形のものがあるだけだ。壁は黒く塗られており、床は混凝土の打ちっばなしで、照明の類は一切ついていない。

縦長の部屋には、『月の間』という名前があった。

「これは、どういう意味かわかるかな」

「単に、あの窓が月みたいで、壁が夜みたいになっている、じゃないの？」

「僕も最初はそう考えた」

しかし、本当の意味は違う。

祖父さんが死んだ一年後、夫のあとを追うようにして祖母さんが息を引き取った。病院のベッドで寝たきりになった祖母さんを見舞いに行くと、この部屋に関する話を教えてくれた。

「祖父さんが一番苦心して作ったのがこの部屋らしくてさ、あの窓が月みたいに見えるから、なんていう安直な理由で名付けられているわけじゃないんだと。それに、

ここからいくら見上げていても、この『月の間』からは絶対に月は見えないそうだ」

「月の間なのにな？」

僕は首を縦に振る。

「そうなの」としばらく思索したあと、彼女は言った。

「じゃあ、確かめに行こう」

大きな梯子はあるか、と彼女が聞くので、僕は家のすぐそばの納屋に置いてあると教える。

さつき苔の間で汗だくになった僕は、他よりも涼しい月の間で一息ついたかったのだが、

「ちよつと、女の子にそんな重い物を取りに行かせる気？」

という、彼女の言葉に、はい、ごもつともです、とうなづいてしまい、僕はまた汗だくなりながら納屋にまで走っていくはめになった。自分の身長よりも高い梯子を手にして、部屋の壁に幾度もぶつけながら、どうにかして月の間の中に入れる。

「じゃあ、君はしばらくこの部屋から出てて」

「なんでだよ」

「鈍いわね。わたし制服なんですけど」

梯子を壁に立てかけて、それを昇ろうとする彼女を見る。左右にわけて束ねられた黒髪が揺れる。きりつとした眉、大きな瞳が僕を睨みつけている。服装は、白のブラウスに紺のスカートをはいていた。汗で肩のブラ紐が透けているのは、僕の胸のうちに秘めておこるか。

「なるほどね」

「許可なく入ってきたら殺すから」

じゃあ制服で来るなよ、と毒づいたけれど、内心では心臓が早鐘を打っていた。

ドアを閉めて、そこにもたれかかると、一枚隔てた向こうから、梯子のきしむ音がもれてきた。それがまたひとつ、またひとつときししみ彼女の気配が高くなっていく。その音が僕の邪な感情をくすぐっていく。

やるなと言われるとやりたくなるし、見るなと言われると見てしまう。

そんな悶々としたジレンマと闘っているところに、彼女の声が響いた。

歓喜とも恐怖とも判別付かない叫びを聞いて、僕は月の間に飛び込んだ。

「大丈夫か？」

見上げた僕の先に、梯子につかまる松本かえでがいて、そして、僕の視線が彼女のスカートの中に流れ込んで。

視界いっぱいを黒い物体が占めて。

僕の顔に。

どすん。

はたして落ちてきたのは、教科書や筆記用具のつまった彼女の鞆であり、僕が入ってきたときの護身用として鞆を持って梯子を昇っていたのだという。

痛む鼻をさすりながら、涙声で彼女に聞いた。

「で、さっきの叫び声はなんだったんだよ」

「わかったのよ」

彼女は天井を見上げる。

「あの窓、ここからじゃわかりにくいけど、表面に刷りガラスみたいな加工がされていて、平面じゃなかった」

レンズのような形だった、と彼女は言った。それがどういう役割を果たすか。入ってきた光を収束させる役割、つまりあの窓から入ってきた光はどこかに像を作り出すということ。それは、どうも僕たちの立って

いる床に作り出すということ。そして、レンズの表面の加工は、どうやら月のクレーターを模しているということ。

見上げるんじゃない、という祖母さんの言葉を思い出す。

床に月ができるのなら、それは、見上げていちゃ見えないわけだ。

いつか、太陽がその軌道を通るとき、僕らの足もとに月が映し出される。それは一瞬で終わってしまうものかも知れないし、毎月、もしかしたら毎日出会えるかもしれない。

いつになるんだろう、と僕は天井の窓を眺め、まだ見ぬ祖父さんの取り込んだ月に想いをはせた。

「いつにできるか、書いてあったよ」

「え？」

「明日だって」

マジで、と僕は目を点にして、松本かえでを見た。

「窓のすぐ横に、『もつとも短い夜のために』って書いてあったの」

「どういう意味だ」

「夏至だよ」

と彼女は、出来の悪い生徒を諭す先生のように教えてくれた。

もつとも夜が短い、ということは、もつとも日が長い一日を指しているわけだから、太陽がもつとも高い弧を描く日、つまり夏至になるということらしい。

「奇跡的に明日は夏至だよ。時間までは書かれてなかったけれど、きつと昼間にできるんじゃないかな」レンズで太陽光を集束させ、床に月を作り出すためには、太陽が真上を通る時のほうが有利だという。

彼女が天井を仰ぐ。僕も彼女の視線につられて、いまだ薄暗い丸い窓を見上げた。

「というわけで、よろしくね」

「はい？」

「明日のことだよ。きつと窓の位置からして、お昼ぐらいに月ができると思うんだけど、念のために朝からこの部屋で待とうと思うんだよね」

いや、それはどういうことですか、という顔を僕がすると、彼女は眉間にしわをよせた。

「ホントに鈍いね、君は。今日、ここにわたしが来た

こと、そして、この部屋の謎が解けたことに運命を感じないの？」

「松本さんも、ここで月が映るのを待つわけ？」

僕の問いかけに、彼女はじとつとした嫌な視線を突きつけてきた。

「松本さんも！ということは、君はわたしに黙って、一人でここにいるつもりだったわけだ」

「いや、そういうわけじゃ」

「わたしが謎を解いてあげたというのにね」

「あの、その」

「こんなに薄情なワトソン君だとは思わなかったよ」

「だって、明日も学校だろ？二人揃ってさぼったら、まずいでしょ、やつぱり、高三なのに」

「あのさ、そんな小さいこといちいち気にしてたら、生きてるの苦しくなるじゃん」

そんなに心配なら、君が学校に行けばいい、わたしはここで月が降るのを待つてるから、という彼女の身勝手な提案に、しかし僕はぐうの音も出ず、彼女が来ることを承諾するしかなかった。

「それじゃあ、また明日もね」

祖父さんの家から出て、初夏の夜を二人で歩いた。僕は自転車を押しながら、無言で歩く彼女の、すこし後ろをついていく。蟬がちらほらと鳴きはじめていた。彼女を駅まで送り、電車がだんだんと遠くなつていく中で、なんとなく今日の出来事のことを考えた。松本かえでとの出会い、祖父さんの家の謎、苔、夏至、月、ブラの紐、そしてスカートの。

「白、か」
僕は自転車にまたがって、力いっぱいペダルを踏み込んだ。

翌日、松本かえでは不貞腐れながらやってきた。

「わたし、晴れ女なのに」

「梅雨だから仕方ないさ」

傘をさしている彼女に、僕は肩をすくめて見せる。お前か、雨男、といちゃもんをつけそうな視線に負け、僕は目を逸らす。

それでも、彼女はとことこと月の間まで進んでいく。濡れた制服から香る雨と彼女のおいが、僕の鼻をくすぐった。

混凝土に直接座るわけにはいけないので、僕が押入れから座布団を二つ持ってきて、僕らはそれを尻に敷いた。

昨日よりも暗い部屋の中で、僕らは手を伸ばせば届く距離にいた。

雨が壁を打つ音だけが、部屋を満たしていた。彼女は、雨で冷たくなった靴下を脱いだ。僕は気づかれなないように、松本かえでの白い足を盗み見た。膝を抱えて座っている彼女は、部屋の中央にぼんやりと視線を漂わせ、爪先を上下に動かしていた。

黒い壁の部屋は、弱い太陽の光で紺色に落ちていた。彼女の息遣いが耳に届くと、とたんに雨の音が遠のいていく。それにどぎまぎして、自分の呼吸が乱れる。息を飲んでしまう音が彼女に聞こえないよう、僕は細心の注意を払う。そして、話しかけるタイミングを窺うのだった。

「ちよつと寒いな」

「……………うん」

今年は例年よりも気温が低めであると天気予報が言っていた、と僕は当たり前障りのないことを口にする。

そう、と彼女は呟く。

声を出したことで緊張がほぐれてきた。それと同時に、伝えなければならぬことがあることを思い出し、僕はちよつと憂鬱な気持ちになったけれど、それを悟られないように、努めて平静を装って言った。

「この家、半年後にはなくなると思う」

松本かえだが、こちらを見た。その表情は、悲しんでいるわけでも怒っているわけでもなくて、心底驚いている顔をしていた。

「土地開発でき、この辺りに高速道路が通るようになるんだって。最初は、近くの山にトンネルを掘る予定だったんだけど、地盤調査でトンネルの話が立ち消えて、迂回することになって、その迂回するルートの場合に、この家が入ってるんだってさ。それで、こないだも役所の人がうちに来て、この土地を売って欲しいって話をした。父さんも、初めは渋ってたんだけど、先々月に祖母さんが死んで、この土地と家に見合う金額を提示されたらしくて、この家を売ろうと思うって、昨日、言われた」

僕は、もちろん彼女が怒り狂うのを予想していた。

祖父さんが建てた、世界にひとつしかないこのヘンテコな家を、高速道路のために取り壊してしまうというのか。しかも、半年後には潰されるのなら、今日、この夏至の日を逃してしまえば、一生、この月を見下ろすことができなくなるのだから。

しかし、彼女の答えは僕が予想したものと違い、「そう、残念ね」

だけで終わり、松本かえでは顔を膝の中に埋めた。

「それだけ、か」

あれ、と僕は首を傾げるよりも、彼女が気落ちしていることに憤りを感じた。もともと彼女には関係のないことだけれど、その関係のないことに首を突っ込んできて、勝手に謎を解いて、ここに上がり込んできたのは彼女の方で、それなら、僕と同じ感情になっているはずだと思っていた。

どうやら、悔しがつているのは僕一人だけで、祖父さんの家が守れないこと、自分の力だけでは、持っている年齢では、この家を道路のために潰すことを阻止できないことが、心底悔しくてたまらなかつた。だからこそ同調してくれる存在が欲しくて、その行き場の

ない感情のはけ口として、松本かえでの存在を求めていたけれど。」

彼女の中では、この家が消えてしまうことは、残念の一言で片づけられることだった。

拳を強く握る。

そんな僕に構うことなく、彼女は淡々と言う。

「無くなったら、また建てればいいだけだし」

ぷつん。

「そんなこと、できるわけがないじゃないか！」

「設計図はあるんでしょ？じゃあ、無理じゃないよ」

烈火の如く反論しようとする僕に、彼女はさらっと言った。

「だって、君のお祖父さんは、君のお祖父さんになつてから、この家を考えて建てたんでしょ？退職してから、建築士の資格を取って、設計図も自分で書いて。それなら、高校生のわたしたちなら、なんだってできると思わない？」

松本かえでは、膝から顔を起して僕を見た。

その表情に、僕は、のどにまで出かけた怒りを失つて、祖父さんのことを思い出した。

祖父さんが退職したのは、僕が小学一年生のときだった。そこから建築の勉強を始め、並行してこの家の原案を練りあげ、それがハッキリとした形になって土台を作りはじめたのが、僕が中学校に入学するくらいだった。

徹夜で作業している祖父さんに、夜食を作ってやるのが僕の日課だった。

ある日、僕は祖父さんに疑問をぶつけた。なぜ、そんな家を建てようというのか。無理をしない方が良い、もう歳なんだからさ、と付け加えると、祖父さんは重たいため息をついて、僕の肩をつかんだ。すぐ近くに光る彼の瞳には、もう還暦が過ぎた人間とは思えないほどの生氣と迫力が宿っており、僕の居心地を悪くさせた。

出来ないことをやってのけるのが人生の醍醐味さ。すでに出来ることを繰り返していても楽しくないだろう。

無理だつて決めつけるのは勝手だが、失敗した人間に、ほら言った通りだろうって、あたかも自分が賢いと

信じて、こつちを蔑むようなことを言うのだけは止めてくれ。お前が成功したんなら話は別だが。

家族や親戚たちが、祖父さんの行動に頭を悩ませている横で、ただ祖母さんだけが、祖父さんの描く家の出来栄えに期待していた。ユーモアに溢れ、訪れた人たちが楽しめるような場所、また来たいと思わせてくれる素敵な場所を。

あのときの期待と、松本かえでの存在が重なる。彼女の笑顔が、この場所と月とに。

僕の頬を涙が伝っていった。とつさに僕は、彼女に見られまいと顔を反対側に向ける。天井を見上げる。曇り色の窓がひとつあった。

「楽観的、だな」

「作るのはワトソン君に任せるよ」

で、わたしが謎を解く係ね、と彼女はまた笑った。

雨の勢いは弱くなったものの、分厚い曇天が空を支配したまま、僕たちは十二時を迎えた。

彼女は、コンビニで買った菓子パン、僕は弁当を広

げて昼食にした。

「美味しそうだね」

出し巻き卵と大根の皮のきんぴらを見たまま、まるで獰猛な獣のような目をする彼女。

「いつも菓子パンなの？」

「違うよ。学校サボるって言ったら、お母さんがお弁当を作ってくれなかったんだ」

啞然としている僕に、彼女は肩をすくめる。

「うちって、そういうところオープンだから」

ちよつと変ってるんだよね、うちの両親、と他人事のように語る彼女に、君も相当変わってるよと言おうとしたけれど止めておいた。

親に嘘について、学校に行っていない僕と、正直に話す松本かえで。

どっちが正しいのか、どっちも正しくないのか、どちらも正しいのか。

答えはないな、と僕は思って、彼女に弁当を差し出した。

「食べていいよ」

「ホントに！」

「座ってるだけだから、別に腹は空いてないんだ」

瞳を輝かせながら、彼女が僕の弁当をがつつく。この調子だと、昼だけじゃなくて、朝食も用意されなかったのかも。彼女が鮭に箸を伸ばす。器用に皮の部分を外して食べる。ワサビのふりかけのかかったご飯を駆け込み、つんとした辛みが彼女を襲って、すこし涙目にさせる。僕は、彼女からメロンパンを受け取り、ビニールを開けてほおぼる。かりつとした表面と中はもっちりした歯ごたえ、ざらめの甘さが口に広がる。

水筒に入れてきた冷えたお茶を二人ですすり、僕たちは一息ついた。

「ありがとう」

きれいに平らげられた弁当を見て、自然と頬が緩む。

「君のお母さんにお礼を伝えといて」

「なんで？」

「お弁当、ごちそうさまでしたって」

「これ作ったの、僕だよ」

今度は、彼女が啞然とした顔で僕を見た。

「うまかった？」

「うん、とつても美味しかった」

なんだか松本かえでから一本取ったような気分になった僕は、彼女に意地悪な質問をする。

「松本さんは、料理しないの？」

「まったく」

「ケーキとか焼いたりしない？」

「買うほうが早いじゃん」

確かにそうかもしれないけれど、と僕は苦笑する。

「これでハッキリとしたね」

と彼女が言うので、何がハッキリしたというのだろうか、という疑問を向ける。

「やっぱり、君が作る係で、わたしが食べる係だね。」

わたしの需要に、君が供給するシステムって素晴らしいと思わない？」

そんな自己中心的な台詞を、堂々と言つてのける彼女に圧倒されて、僕は知らず知らずのうちに首を縦に振らされていて、それじゃあ、僕の需要はどんなものになって、彼女は何を供給してくれるのだろうかと考えたとき、さつきみたいに僕に勇気を与えてくれる松本かえでの活力があれば、僕は彼女のどんな要求にでも応えられるような気がして、そう思う僕が、すこしだ

けど祖父さんに近付けた気がして嬉しくなった。まだ、つぼみのような僕たちの関係は、どんな未来を創りだしていくのだろうか。

昼食を終えた彼女は、眠い目を擦りながら、布団には小さい座布団の上で、まるで猫のように丸まろうとしていた。

あれ、さつきのテンションはどこに行っただんですか、松本さん。

「昨日、一睡もできなかつたんだ」

大きな欠伸をひとつ、彼女は腕を枕にして寝る態勢に入っていた。かろうじて目は開いているものの、瞼がどうも今日の天気のように重そうだ。

「なんで眠れなかつたの？」

「今日が楽しみだったから」

だって今日ここにいることって奇跡みたいだから、と彼女が言う。

僕は、そうだね、と答えて顔を天井に向けた。

「ねえ」

「なに？」

「なんか面白い話とかかないの？」

例えばこの家で他に謎になっているところとか、と彼女は眼を擦りながら言った。

「謎になっているところはないけれど」

僕はこの家の見取り図を頭に描く。ひとつ一つ部屋の名前を思い出す。

「感心する部屋がいくつもある」

「どんな部屋なの？」

「二階から降りるための部屋なんだけど、床にドアが付いている」

へえ、と彼女が反応する。

「細い通路を下に進むと、ダイニングキッチンに据え付けられている飾りの暖炉に出てくるんだ」

「サンタクロースだ」

正解、と僕は言う。

「ねえ、他には？」

「犬の間つていうのがある、それは」

「ちよつと待って、考えるから。えつと、犬小屋みたいになつてるとか？」

「ハズレ。それはいくらなんでも安直過ぎる」

「調教道具がたくさんあって首輪をはめられると

か？」

「うちの祖父さんは変態か」

いや、こんな家を造る時点で、十分変態かもしれないな、と僕が考え込んでいると、彼女が、じゃあどういいう部屋なのか、と聞いてきた。

「部屋じゃないよ」

「あれ？」

「勝手口のことだよ。外の庭に出るためのドアなんだ」

「ああ、なるほど、そういうことか。猫がコタツで丸くなるなら、犬は喜び庭かけ回るんだ」

「そういうこと」

君のお祖父さんは素敵だね、と彼女は笑いながら、身体をうねらせて、寝やすいポジションを探しながら、すうっと眠りに落ちていった。

静かに寝息を立てる彼女を見る。無防備な姿を前に、僕の理性がうずいていく。華奢な素足の擦れ合う音が、僕をくすぐっていく。彼女の髪の毛の隙間からのぞく寝顔が、僕の心をつかんで離さない。くびれているウエストの辺りが、下心を誘惑してくる。

くそう、と僕は悶えながら瞳を閉じる。何も考えないようにしようとするほど、松本かえでの肢体が僕の思考を占拠し、本能を刺激していく。彼女に手が伸びては、僕のなけなしの理性が働いてそれを阻止する。単に僕が怯えているだけなのかもしれないけれど。

思考とため息を繰り返すうちに、僕の頭も疲れてきて、彼女と同じように座布団の上で丸くなって。

目が覚めた時、天井が明るくなっていることに気がついた。どうやら、雨が上がったようだった。

変な体勢で眠っていたために、関節が錆びついており、身体を伸ばすと肘や腰や膝がきしみを上げた。ストレッチを始めていると、松本かえでのほうも起き上がって、眠気まなこで辺りをきよろきよろと見回した後、僕に視線が止まると、

「ここは、どこですか」

寝ぼけている彼女は、お前は誰だ、とまで言い出す始末で、僕はここが祖父さんの家で、床に月が出るのを待っていたけれど、雨が降っていたために、その

チャンス逃したことを彼女に教えた。

「思い出した？」

「月、出来てるよ」

「はい？」

彼女の指差した先を見る。

床の真ん中に、朱色に染まった円が出てきていた。

クレーターまでも再現されているそれは、まさに空に浮かぶ月そのものだった。赤く染まった月は、しかし刹那的なもので、それに見入った瞬間に、像がぼやけていき、余韻すら残さないまま霧散していった。

たった数秒、この部屋に月が舞い降りた。

「これが、月の間の正体なのか」

「あつという間、だったね」

床を見下ろしていた僕たちは、そろって天井を見上げた。

「本物の月みたいだったな」

うん、と彼女がうなずく。

祖父さんが作った家に残された謎が、いま解かれて……、

「あ！」

と松本かえでが大声を上げる。

「わかったかも」

「何がわかったの？」

「夕日の理由だよ」

首を傾けている僕に構うことなく、彼女は興奮しながら続けた。

「夕日が赤くなる理由って知ってる？」

「ええと、なんだっけ」

「昼間よりも遠くなるからだよ」

太陽の光は大気中を進んでいく。そして、空気中の塵や水分に当たることによって光はどんどん弱まっていく。昼間よりも、日の出日入りのほうが、斜めに陽が差し込む分、空気の中を多く通ることになる。

「だから、夕日や朝日は、肉眼で確認できるぐらい弱い光になってる。お祖父さんが考えたこの仕組みには、その弱い光が必要だったんだよ」

「でも、松本さんが見てきたあの窓は、かなり分厚かったんだろ？」

より強い光があつたほうがいいんじゃないのかな、と僕が言うと、彼女が待ってましたと言わんばかりの

笑顔で答えた。

「ポイントは、虫眼鏡と混凝土だよ」

いきなり出てきた虫眼鏡という単語で、僕の脳内に閃きが走る。

「そうか、熱くなりすぎるんだ！」

「その通り、ワトソン君」

小学生の時、虫眼鏡で黒い紙に火をつけたことを思い出す。太陽の光を一点に集めることで、エネルギーがそこに凝縮される。

だからこそ、床には混凝土が採用されているのさ、と彼女は、月ができた中央付近に手を近付けた。

「あの一瞬だけなのに、やっぱり、まだ相当な熱を持っていて。これを昼間の光でやろうとしたら、何倍もの熱量がここに蓄積されることになる。混凝土がいくら熱に強いからといって、周りに燃えるものがあるば、火事になる可能性もある。だからこそ夕日で作るしかなかったんだ」

敷いていた座布団を見る。確かに、これに火がつけば大変なことになるだろう。

海が見える場所ということは、太陽は水平線に沈ん

でいく。そのとき、太陽は一番遠い距離になり、光はもつとも優しくなる。

「それも見越して、この場所に家を建てたのか」

「さて、それは断言できないよ。これは苦肉の策かもしれないし」

「どういうことだ？」

「赤より白いほうが、月っぽいから」

確かに、月を描けと言われて、月を赤く塗りつぶす人はいない。黒い空に白く輝くほうが、月として情緒があると言える。

「ガラスに表面加工さえすれば、光の力は制御できると思うんだけど、それでも夕日にするしかなかったのは、太陽光の威力を甘く見ていたからだと思う。ガラスの加工は職人技だからお金が必要になる。けれど、お祖父さんの資金ではそれが足りないから作り直せなくて、夕日で月を作るしかなかったんじゃないかな。それに」

松本かえでは続ける。

「あの窓から見えるのは大きな鏡だよ」

まさか、と思つて僕は窓を見る。

「反射を使って、真上から夕日を照らしているんだよ。潜水艦の外をみるやつみたいにしてき。レンズで像を作り出すためには、真上からの光が必要なんだよ」

「そんな構造になっているなら、ここから見ても気づくだろうし、外から見ても……」

「下から見上げてもわからないよ。梯子を使って近づいても、レンズが分厚いから外の景色は曖昧で、鏡つていう確証は得られなかった。それにこの家は、立方体の形になっていいるから、そういう構造だということ意識的に考えさせないようになっていいるんだと思う」

「だから、気づかない、のか」

「最初は、きつと一番上にレンズを取り付けて、本当に月ができるか試したんだと思う。そしたら大変な目にあつて、仕方なく天井を下げ、床を混泥土にして、夕日を使うことにしたんだよ」

祖母さんの言葉は、そういう意味だったのか。この部屋を作るのが、一番苦心したというのとは。

僕も床の中央に手を置いてみる。彼女の言うとおおり、他の場所よりも温かい。一瞬で消えてしまう月でも、

自分がいた証をここに残している。触れれば伝わる温もりがある。祖父さんのこの家も、あの月と同じだ。いつかは消え去ってしまっても、目に見えない何かを、誰かの心に残していく。

西の空には、夕日が沈んだ後も、しばらくは赤い足跡が漂っている。

かすかに赤く染まった部屋で、僕は松本かえでに身体を向けた。

「ありがとう。これで、謎はすべて解けた」

自然にこぼれた感謝の言葉に、松本かえでは微笑んで答えた。

「お安いご用さ、ワトソン君」

すつかりと日が暮れた道を、僕たちは歩いてきた。昨日のように。僕は自転車を押しながら。違うことは、僕のすぐ隣に松本かえでがいることだった。

雨上がりの空気は澄んでいて、体の内部にまで染み込んでくる。水たまりが、雲間からのぞく星空を映している。穏やかなすみれ色の空だった。落陽した水平線は橙色をしており、夜になる景色にあらがっていた。

風が、僕と彼女の髪をなでていく。電線についた雫を落としていく。

あのさ、と松本かえでが言った

「お昼にした話、覚えてる？」

「うん、覚えてるよ」

僕が作る係で、君が食べる係だろ、と僕は言った。

「それがどうかしたの？」

「ううん、なんでもない」

横を歩いていた彼女が、助走をつけて大きな水たまりを飛び越える。ふわつと浮き上がる髪とスカート、体操選手のように、着地したとき両手を高く掲げる。

手に握っていた、まだ湿っている靴下が揺れる。

鞆を背負いなおして、松本かえでが振り返った。

「忘れてきちゃった」

「？」

「傘」

あ、と僕も傘を持っていないことに気がつく。祖父さんの家は、もう小さくなってしまっていた。

取りに戻ろうか、と僕が自転車にまたがろうとしたとき、松本かえでの声が僕に届いた。

「また明日、一緒に取りに来ようよ」
彼女は笑顔だった。

「いいでしょ？」

僕も笑ってうなずいた。

晴れたといっても、雲はまだ空に浮かんでおり、今宵の月を隠している。

そして、もつとも短い夜が始まる。

月の足跡

2010年 1月31日 公開

著者 彩野

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。